

平成 21 年度 スタンフォード大学海外研修 派遣報告書

徳島大学大学院 ヘルスバイオサイエンス研究部 富永正英

スタンフォード大学研修の参加目的は米国の放射線診療の実際、Radiological Technologist (R.T.) の制度を理解すること。また、世界トップレベルに位置しているスタンフォード大学が何を見て、何を考えて、何を目的として研究を進めているのかを知ることである。

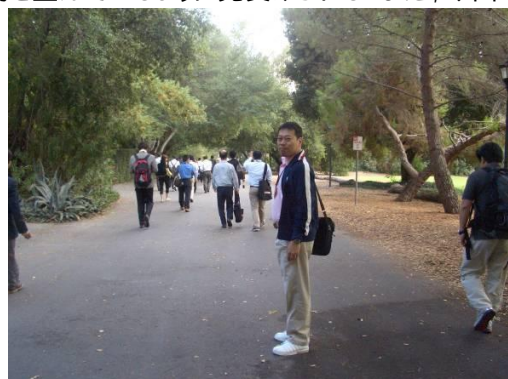
米国の放射線診療においては、全てのフィールドにおいて細分化されている。これはある意味、効率の良い方法であると感じられる。その中でR.T.の職種について言及すると、彼らは基礎となるライセンスを所持し、その後自分が将来専門としたい領域を目指して、次なるステップを踏みその業を得る。このことは個々の専門分野に集中して仕事を進めることができ、その領域に対して深くまで追求することが可能であるが、専門としている領域以外についての知識は乏しい。よって公のライセンスであるMedical Physicist及びPh.D.の資格を得た人が研究及び臨床の現場を統括しているようである。一方、我が国の診療放射線技師は、放射線に関する全ての業を対象にしたライセンス制度である。よって、放射線に関する業の全てを網羅しているが、その為にエキスパートとしての活躍が阻害される傾向にある。近年では各分野に分かれた専門技師と呼ばれる認定制度が普及してきているが、実際に医療の現場で担当している分野と異なることも否めない。しかしながら、日本の場合には診療、研究において、自分の専門領域以外のことに関しても経験、知識を有するため、柔軟な思考を得ることができ、Medical Physicist及びPh.D.の役割を技師が行っている。これらのことを踏まえると日米どちらのシステムが良いというのは困難であり、米国の良い部分を日本の医療制度にモディファイした形で取り込むのがベターだと考えられる。

スタンフォード大学の研究の一部分ではあるが、CT、MRI、PET、分子イメージングについて学んできた。各講義内容は非常に分かりやすくまとめられ、充実した内容であった。特に分子イメージングは近い将来、我が国でも実用化される日が近づいてきていると感じた。また、各ラボと臨床現場の見学を行った。各ラボは最新の実験装置・モダリティを有し、充実した環境であった。病院内の臨床の現場では、実際に患者と接している現場のR.T.の方々とお話しする機会があり、講義とは違う意味で臨床現場の情報を収集することができた。

今回の研修で得られた様々な情報は、自分自身の研究に活かすものと世間に活かすものに分けられると思われる。私は放射線治療を専門に仕事しているので、スタンフォードで行われている研究内容を放射線治療に応用したいと考えているが、現時点では研究材料、モダリティ、実験装置等の関係から今すぐには行かない。しかし、研究に関する考え方であり、姿勢については明日からでも十分に活かしていきたい。世間へのフィードバックは私が大学の教職員ということもあり、まずは保健学科の学生に照準を定めたい。あと、各種学会・研修会等でより多くの人々に研修で得た情報を伝え、最終的には日本の医療にフィードバックさせることが出来ればと思う。

今回の感想を述べさせていただくと、日米の単純比較を行うことはできないと考えている。それは根底に医療制度に違いがあるからである。米国は今、日本のような医療制度に興味を示しているようなことが報じられているが、日本の現場の医療関係者は米国のような診療体制を望んでいるように見受けられる。また、今回訪れたスタンフォード大学は最先端の医療機関の1つであり、民間の一般病院ではどのような診療体制が取られているかも疑問である。やはり私たち一人一人がいろんな問題と向き合って医療にとどまらず、日本の社会のために貢献できる人材となることが、今できる重要な課題であると思われる。

最後になりましたが、今回の研修で縁の下での力持ちを演じてくださった皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。



ワクワク、ドキドキ!?しながら歩いた初日の通学路